

学びながら
ふらり散歩

大田区自然観察路

「池のみち」の
生物・植生

洗足池・小池周辺

洗足池は昔から景勝地として「名所江戸百景」(広重画)や「東京市八名勝」(昭和7年選定)などで有名で、現在までその優れた風景が残されている。洗足池周辺は、武蔵野台地の一部である荏原台がいくつかの谷によって樹枝状に刻まれている地形で、その谷地部が池や湿地になっていた。洗足池や小池はその一部であるが、古来よりため池として谷筋の水田かんがいに利用されてきた。

昭和になって池上線が開通し、土地区画整理が進展して住宅地となり、洗足池はかんがい用水としての役割を終え、風致地区に指定されて公園として維持管理されることになった。洗足池周辺は近年、広い宅地の分割やマンション化が目立ち、従来のみどりが多くゆったりとした住宅は少なくなった。

「池のみち」は、みどりに囲まれ、近年水質も改善された洗足池を中心に、洗足池を小規模にしたような小池とともに景観に優れ、水辺には多くの野鳥やトンボなどがみられ、生態



系も豊かなコースである。ちょっと足を延ばせば洗足池の源流である清水窪湧水や洗足池下流の洗足流れも散歩にはよい。また、周辺には史跡が多く存在するとともに、水面や周囲の林を含め広いオープンスペースが確保されており、大都会の中のアオアシとして私たちの日常生活に文化的なかとやすらぎ、うるおいを与えている。

池のまちの
樹林

洗足池北側には通称“桜山”と“松山”と呼ばれる一画がある。桜山には100本近いソメイヨシノがあり、大田区の桜の名所となっている。松山のクロマツや水生植物園近くのハンノキの林は、美しい景観をつくるとともに、野鳥の営巣、かくれ場および移動経路として大切である。池の周囲にはコナラ林をはじめ、ムクノキ、スタジイなどがみられる。小池公園は、春の桜（ソメイヨシノ）、秋の紅葉（ミツバカエデ、メグスリノキ）のほかに、コウゾ、アオダモ、オニグルミなどがみられ、散歩の楽しみの一つとなっている。



ソメイヨシノ (バラ科)

江戸時代末期に改良された栽培種。エドヒガンとオオシマザクラの交配種で、日本の代表的なサクラ。



オニグルミ (クルミ科)

落葉高木。果実は食用、材は家具、樹液は染料となる。



コナラ (ブナ科)

落葉高木。花期は5月、堅果はその年の秋に熟す。

洗足池公園植生図



クロマツ (マツ科)

常緑高木。樹皮が灰黒色。海沿いに多く、庭にも植えらる。



メタセコイア (スギ科)

落葉高木。化石として発見された後、1945年中国四川省で現存が確認された。



洗足池・池月橋

小池公園植生図



ハンノキ (カバノキ科)

落葉高木。平地の湿った所を好む。



ガマ (ガマ科)

夏に円柱形の穂をつける多年草。水質浄化に役立つ。



小池公園



ヒイラギモクセイ (モクセイ科)

常緑小高木。花は小型の白色で香りがよく、10月に咲く。



ヨシ (イネ科)

水際に背の高い群落を形成する多年草。



アオダモ (モクセイ科)

落葉高木。木製バットの原料。



コウゾ (クワ科)

落葉低木。古くから和紙の原料として知られる。

野鳥

池のみちには、広い水面とそれを取り囲むように樹木が茂っているため、水辺の鳥や林などを好む鳥が数多くみられる。特に冬は渡り鳥の楽園になる。大自然の中とは異なって野鳥の生活圏が集中しているため、人との距離が近く、観察がしやすくなっている。



コゲラ (キツツキ科)

スズメくらいの大きさのキツツキ。公園や屋敷林で見られる。「ギィー」と鳴く白黒の小さな鳥。



シジュウカラ (シジュウカラ科)

スズメより少し小さく、胸にネクタイのような黒帯がある。昆虫やその幼虫、クモや草木の種子などを食べる。



ツミ (タカ科)

キジバトより少し小さいタカの仲間。近年、大田区の公園などでよくみられるようになった。



メジロ (メジロ科)

スズメより小さな黄緑色の鳥。その鳴き声は「長兵衛、中兵衛、中長兵衛」と聞きなされる。



カワセミ (カワセミ科)

コバルトブルーの目立つ人気の鳥。洗足池などでカメラマンのレンズの先にいることが多い。



カイツブリ (カイツブリ科)

潜水して主に小魚を食べる。鳴き声は「キュリ」「キュリリリ・・・」とけたたましく鳴く。



コサギ (サギ科)

足指が黄色い。水中で足指をふるわせて、出てきた魚などをとらえる。



アオサギ (サギ科)

日本のサギ類で最大。主に魚類を採食し、ほかに両生爬虫類など何でも食べる。



カワウ (ウ科)

潜水して魚をとらえて食べる。採食後に、よく翼を広げて乾かしている姿を見かける。



マガモ (カモ科)

冬鳥。中央尾羽が上にカールしていて、本種の改良種のアヒルにも同じ尾羽がある。



オナガガモ (カモ科)

冬鳥。尾羽が長いカモで、あまり大きくない声で「ピル ピル」などと鳴く。



ユリカモメ (カモメ科)

冬鳥。東京都の鳥で、この名の鉄道がある。くちばしと足が赤褐色で鮮やか。



カルガモ (カモ科)

大田区の公園や川で繁殖。10羽ほどのヒナを連れて泳ぐ姿をたびたび見かける。



キンクロハジロ (カモ科)

冬鳥。夕暮れにねぐらから飛び立って採食場に行き、潜水して甲殻類や水草、海草などを食べる。



バン (クイナ科)

泳ぎ回るよりも、大きな足指で水際や水草の上を歩き回って、昆虫、草の芽、葉などを食べる。



オオバン (クイナ科)

バンよりも泳ぎ回って採食、休息をすることが多い。足指には特異な水かきがある。

トンボとチョウ

公園内の樹林を丹念に観察してみると、そこには昆虫など小さな命の世界が垣間見られる。特に散策路にそって植栽されている花にはチョウが舞い、水辺では多くのトンボを観察することができる。



オオシオカラトンボ (トンボ科)

林に囲まれた小さな水路や水たまりに数匹ずつおり、多数を見かけることはない。シオカラトンボとはすみ分けて生息している。



コシアキトンボ (トンボ科)

腰の白が目立つ。羽化後しばらくは水辺を離れて、公園や空を群れ飛ぶことが多い。



コノシメトンボ (トンボ科)

赤とんぼの仲間。翅端に褐色斑がある。オスは成熟すると全身が赤くなる。プールで見られることも多い。



シオカラトンボ (トンボ科)

体の色のちがいがから、メスはムギワラトンボとも呼ばれる。



ショウジョウトンボ (トンボ科)

赤とんぼの仲間ではないが、それ以上に真っ赤で真夏の風物詩。



アオモンイトトンボ (イトトンボ科)

オスは胸部が緑色で腹端に青色斑がある。



ウチワヤンマ (サナエトンボ科)

初心者にもすぐに区別できる。腹端にうちわ状の突起がある。ヤゴは深い池の底で育つ。



モノサシトンボ (モノサシトンボ科)

黒地に白で等間隔の目盛が入った姿をしている。水辺よりも付近の木立を好む。



アオスジアゲハ (アゲハチョウ科)

敏捷に飛び、翅の水色のラインが目立つ。夏にはヤブガラシの花によく集まる。幼虫はクスノキやタブノキの葉を食べる。



ナミアゲハ (アゲハチョウ科)

幼虫はサンショウやかんきつ類の葉を食べる。その姿は最初、鳥の糞に似せていて外敵から身を守っている。



モンシロチョウ (シロチョウ科)

菜の花やキャベツ、ダイコン畑が街中から減る中で、家庭菜園などでかろうじて幼虫が生息している。



イチモンジセセリ (セセリチョウ科)

6月頃から見られ、秋になると数が増える。幼虫はススキやイネを食べる。



ベニシジミ (シジミチョウ科)

翅のオレンジ色が目立ち、春から秋まで見られる。幼虫はスイバの葉を食べる。



アカボシゴマダラ (タテハチョウ科)

後翅に赤い斑紋列がある。中国から持ち込まれたもので、関東地方に広がっている。要注意外来生物。



コムスジ (タテハチョウ科)

翅を開くと3本の白条が横一線に並ぶ。幼虫はクスやフジなどマメ科の植物の葉を食べる。



ツマグロヒヨウモン (タテハチョウ科)

秋から春まで花壇のパンジーが幼虫の食草になることが、近年分布を広げた理由のひとつと言われている。

花のある風景

洗足池も小池公園も公園としての整備がされているため、四季を通じて花を楽しむことができる。春、ソメイヨシノの開花でにぎわったあとも、シランの赤紫色(4~5月)、スイレンのピンク(5~8月)、ツブキの黄色(10~12月) など色とりどりの花を楽しむことができる。



ハンゲシヨウ (ドクダミ科)

水辺に群生してみられる。全草に特有の臭気がある。6~8月の花期に、花に近い葉の下部、半分くらいが白くなる。



コウホネ (スイレン科)

浅い池や沼にみられる。6~9月に黄色い花が咲く。



カリガネソウ (クマツヅラ科)

和名の由来は、花の様子を雁の首に見立てたもので、8~9月に青紫色の花が咲く。全草に強い臭気がある。

池のみちでみられる

水辺の生き物たち



コイ (コイ科)

口元に2対のヒゲがある。雑食性。



メダカ (メダカ科)

寿命は1〜2年。一般的なクロメダカのほかに、品種改良されたヒメダカが有名。



ニホンスッポン (スッポン科)

他のカメと異なり、甲羅表面は角質化していないので柔らかい。噛みつく力が強いので注意が必要。



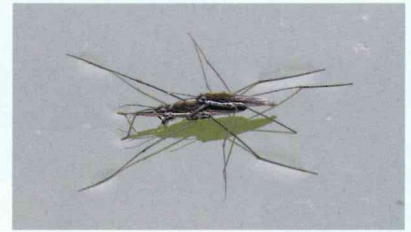
クサガメ (イシガメ科)

昼行性のカメで、日光浴を好むことから、池の岸、岩場などでよくみかける。



ブルーギル (サンフィッシュ科)

北アメリカ原産。特定外来生物に指定され、放流が問題となっている。



アメンボ (アメンボ科)

水面に落ちた昆虫の体液を吸うカメムシの仲間。晴れた日には活発に飛び回る。

清水窪湧水と洗足流れ



洗足池流入口

清水窪湧水は、東急目黒線大岡山駅の北、目黒区との区境にあり、洗足池に流入する清水窪湧水路の谷頭部にあたり、かつては広い湧水池があった。池は現在ではわずかな広さになっていて、水道水の補給、ポンプ循環が行われている。池の余水は、かつての洗足流れに沿う暗渠を通して洗足池に送られている。

洗足流れは、清水窪湧水および洗足池周辺の谷から湧出した水で形成された流れで、かつては下流部の水田のかんがい用水に利用されてきた。旧水路は現在、すべて暗渠になっているが、洗足池下流ではその上部に人工的に水路がつくられ、水路脇には遊歩道がつくられてサクラが植えられるなど住民の憩いの道になっている。洗足池からの水は、ポートハウス横の水門から放流されている。一方、小池周辺も湧水が豊富で、“コウノス流れ”と呼ばれ、かんがい用水に利用されていた。

現在、洗足流れは、水質や水辺環境が良好に維持されている。



洗足流れ

大田区自然観察路『池のみち』の生物・植生

発行／平成30年 大田区環境清掃部環境対策課

編集／(一社)地域パートナーシップ支援センター デザイン／松井由莉

写真／大塚 豊、小野紀之、鈴木百合子、山邊功二

※このパンフレットは区民協働調査を基に、区内環境団体(おおた野外博物館、多摩川とびはぜ俱樂部)と協働で作成したものです。